



091596-000-9

特11-647

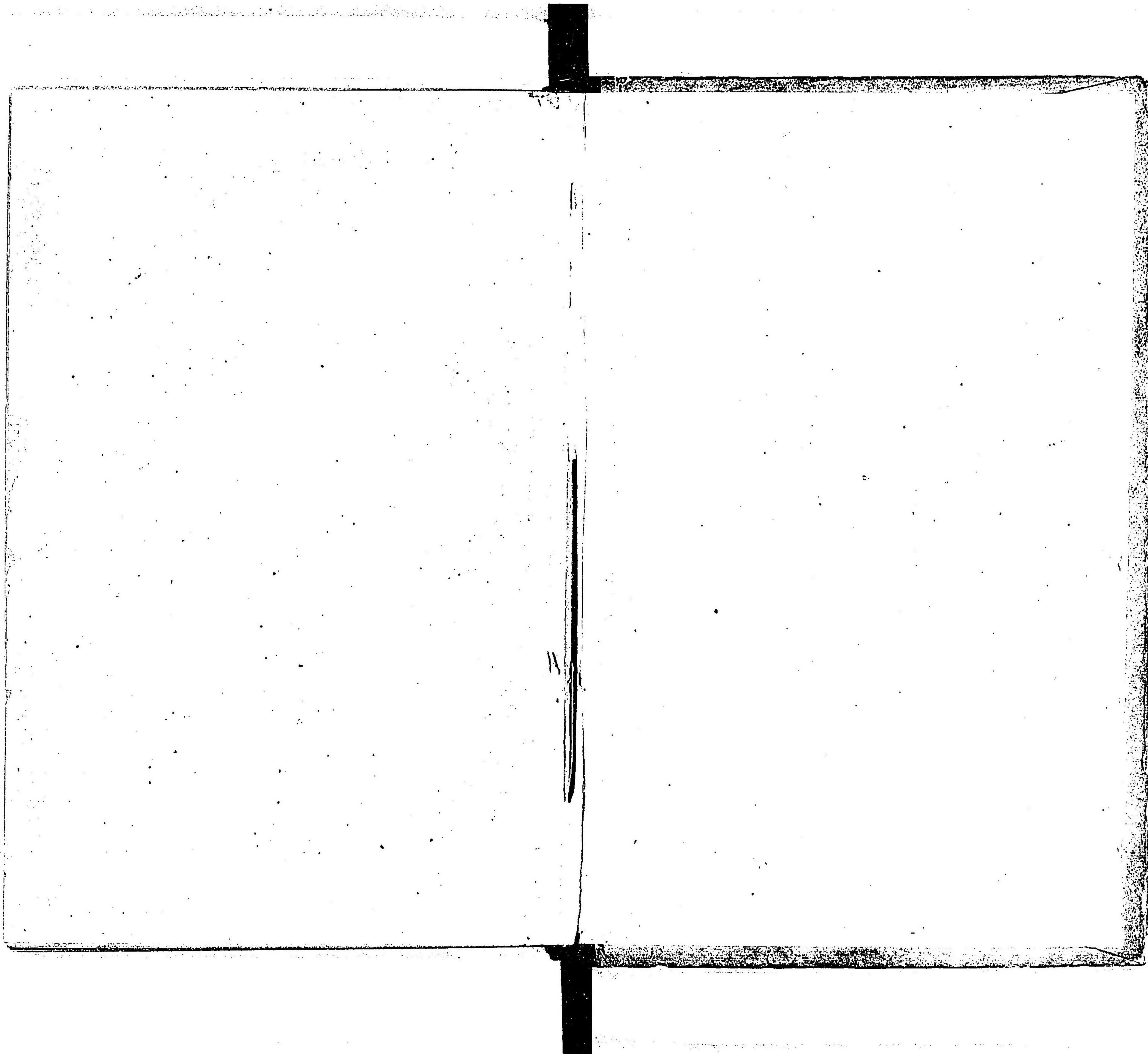
おどけ新文

瘦々亭 骨皮道人/著

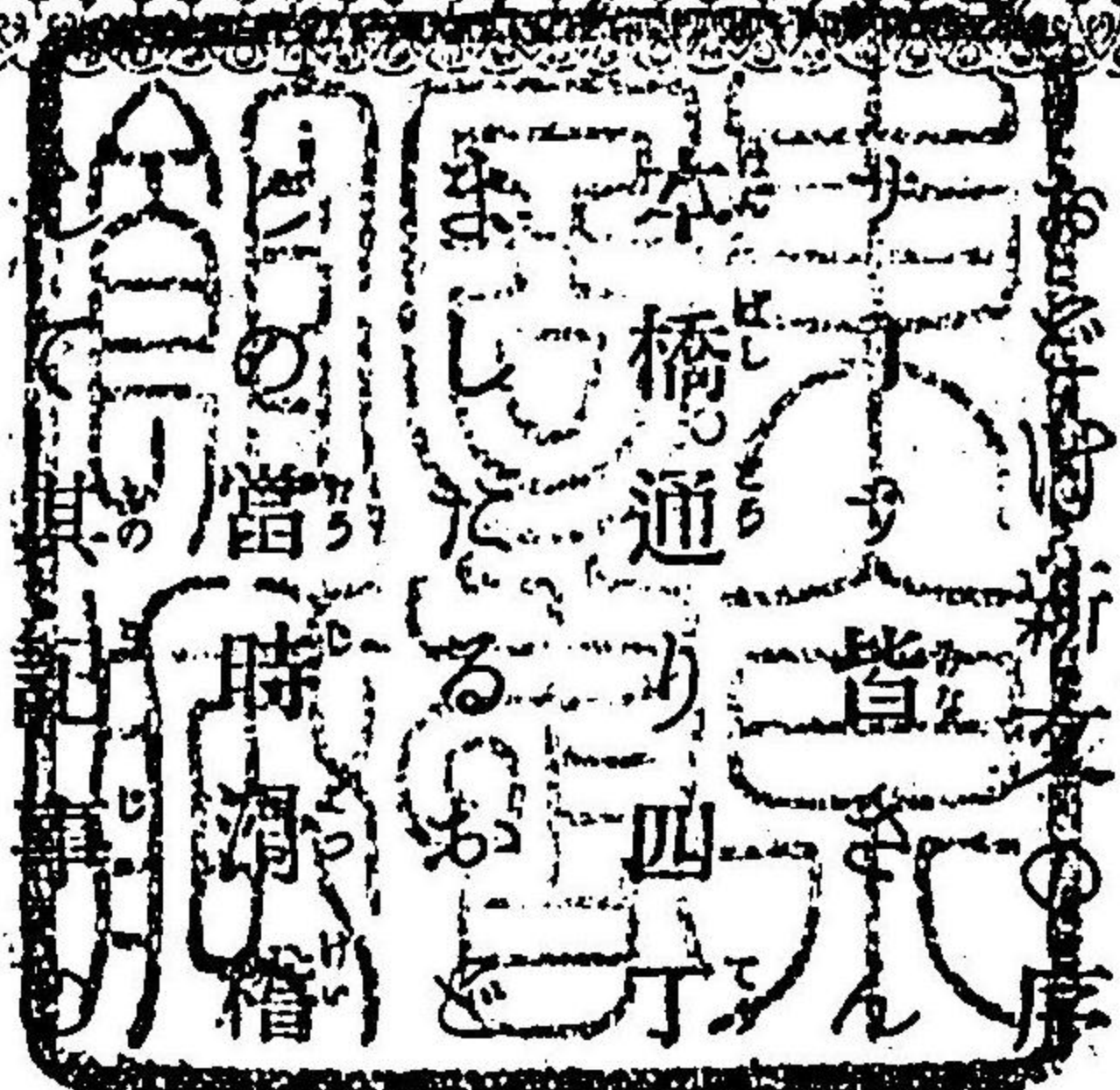
M22

DBO-0040





No 16497



御覽じませ是は此度東京は日
 目の金櫻堂よりエ、發
 け新文エ、作者の皆
 の大先生骨皮道人で御
 面白事ハ一々申せませんが
 其大略の献立ハエ、先づ第一が慣例うら其
 次酒亞説維放續き話一エ、其外に又た何
 様な四かみ面のお爺さんでも何様な澁ッ面の





小僧なり
 置ても買て下さいト吐鳴者ハ書肆金櫻堂の
 下無双のおどろ新文何卒皆さん翠玉を質に
 笑廣告文ハ此一小冊で残らず分るサ一サ天
 膝栗毛の滑稽小説からエ、其外また面白可
 ね婆さんでも入歯を外して笑ふと云ふ一夜

おどけ新文序終

おどけ新文目録

◎ 慣例 交際定例

◎ 酒亞説 二章

藝妓今昔論

◎ 雑放 十八件

雙れ誤解

明盲れ遁辞 雙れ誤解
 清潔好むハ無かつた 法螺の吹上手

半風武の悶着 父子の眞

近い火事ハ見へあい 兄の狡猾

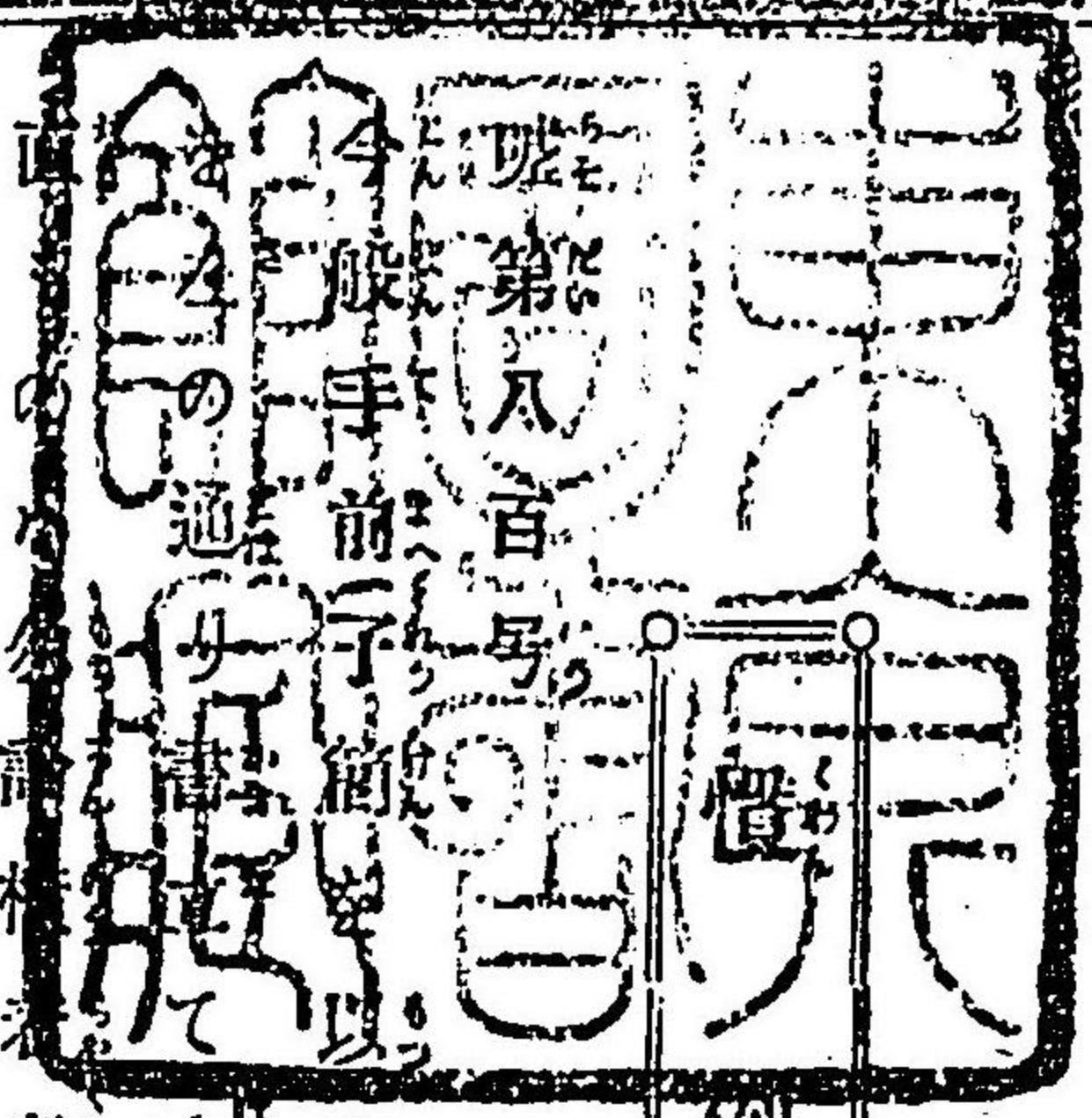
寐兒の教訓 貧乏大黒

花兒の頓智 吝嗇な婆さん

山神の即案 眞似の返報

特刊
647

おどけ新文



編輯人 骨皮道人

今般手前子簡を以て無^い智^ち恵^えを^あま^また^け絞^しり出^だ交^か際^{さい}定^{ぢやう}例^{れい}
 直^ちの^の通^{つう}り^り書^{しよ}成^{ぢやう}て本^{ほん}年^{ねん}本^{ほん}月^{げつ}本^{ほん}日^{じつ}只^{ただ}今^{いま}より施^し行^{ぎやう}致^{ぢやう}し^し條^{じやう}正^{ぢやう}
 者^{もの}の^の人^{にん}間^{げん}ら^らし^しく此^{この}定^{ぢやう}例^{れい}を^あら^らし^し中^{ちゆう}へ吞^の込^こみ決^{けつ}ま^まて他^た人^{にん}の^の鼻^{はな}
 撮^とら^らざ^ざる様^{よう}注^{ちゆう}意^い致^{ぢやう}は^はし此^{この}旨^{しめ}餘^{あま}計^{けい}な^なお世^せッ^ッ買^かな^なが^がら
 一本^{いっ}喰^くは^はせ^せし事^{こと}
 明^{めい}治^ぢ何^{なん}年^{ねん}何^{なん}月^{げつ}何^{なん}日^{じつ}

一重^{いっじゆう}ぎぬ 訝^ちな無^む心^{しん}状^{じやう} 一^{いっ}夜^や膝^{ひざ}栗^り毛^{もう}
 變^{へん}流^{りゆう}怪^{かい}の誤^ご披^ひ露^ろ並^{なら}び^びよ變^{へん}流^{りゆう}怪^{かい}の臭^{しゆう}句^く三^{さん}十^{じゆう}

◎よせぶみ 五章

支^し度^どの^の宜^{よろ}い^いか 心^{こころ}の^の儘^{まま}なり
 火^か事^じを^を出^ださ^さぬ工^く夫^{ふう} 人^{ひと}間^{げん}も草^{くさ}木^きの^の如^{ごと}し
 お菓^お子^こな^な話^わし

◎廣告 五件

奉^{ほう}公^{こう}人^{にん}雇^こひ^ひ入^いれ^れ廣^{くわう}告^{こく}
 馬^ば鹿^かふ^ふ附^つる^る藥^{やく} 財^{ざい}木^き入^い札^{さつ}排^{はい}ひ^ひ廣^{くわう}告^{こく}
 厄^{やく}介^{かい}國^{こく}へ^へ出^{しゅつ}發^{ぱつ}廣^{くわう}告^{こく}

◎特別廣告

おどけ新文日録終

自分免許交際曲長
從祿位裙誤等薄癩
肩尾翠

交際定例

第一條 凡そ交際を爲さんとせる者の虚言を突て他人を騙し又ハ滅法界の法螺を吹て大風呂敷を廣げるべから

第二條 頭割勘定の約束にて酒を飲み或ハハ女郎買をせしときハ必らず他人ハ迷惑をかけぬ様その勘定を出す

第三條 他人の家へ行き先方にて御馳走を爲し格別自分の糞中ハ差響きあき時ハ遠慮なクムシヤハ食ふべし但し吝嗇坊の家ふてハ此限ハあらず

第四條

金が敵の世の中あれば假令ハ親兄弟親類友達と雖も借た金の約束通り相違なくチャンを返し決して治安裁判所より呼出状の來るを待つべからず

但し熨斗をつけて貰った時ハ元手の入らぬお辞儀を幾度とあく丁寧とせるのみにして別ハ請取証又ハ証書を出せよ及ばせと雖も同去貰ひ物小ても抽の下からコッソリ貰ひし時ハ立派ハ印紙を帖て請取証を出すべし

第五條

人と應對せる小餘リヘイハと米搗ばった見とやうに頭ハかり下るハ諂諛と爲り又た餘り頭を下ぬも横柄ハ見へるゆゑ宜しく其程のよい宜頃加減ハ處を守

第六條 人間よの利功者もあり馬鹿者もあり貴き者もあり賤き者もあり種々様々のものあれども縁も由緒もなき者の馬鹿と雖も構ふ事なし利功と雖も恐るゝに及ばそ總て自分の關係ある者だけを兄弟と思ふて交際せべし

第七條 牛の牛連と云ふは昔しからの規則あれども強ちこの規則を守るよ及ばず善き友なれを仲間の者よあらざるも交はるべし若し悪き友と思へば假令ひ我仲間の者よりとも鼻を撮んで之を避べし

第八條 男女同權と云ふは男女交際とか色々れ説の流行する今日なれども他人の細君又の權君と親するの宜からず但し御亭主立會の場合に於ては此限よあらず

第九條 友達同志相集り各々自腹を切て酒を飲み又の屁暮者と呼んでベココ三味線を弾せぬの敢て差支へなしと雖も仕舞に拳固を振廻して警察に御厄介なるやうな野暮な大亂痴機を仕出精べりらす

第十條 人を見たら泥坊と思へと云ふ規則の少し酷過る様なれども元來人間の腹の中よ現在血を分と親子でも知れぬ者なり況て赤れ他人の猶更の事あり殊に追々人情も馬皮紙より薄ッ片羅になるの傾きあれば何人よ限らぬ先く何事も用心して唇の毛を抜れぬ様よ氣を附て交際せべし

酒啞説

○岡目八目論

日本橋の邊り腥さき風鼻を衝て魚市正盛んなるとき
一羽の鳶あり魚籠の際を狙って急翼一翔丁稚が携ふる所
の鰯兒二三尾を撈ひ去り万世橋に邊り砂埃り面を拂ひ馬
車人車甚だ雑沓のとき一人は撈兒ありチヨツと人の寸虚
を覗ひ速脚一動田舎漢が懷裏の財布を抜て走る鳶や撈兒
や其攫奪るの速かなるとピカリと光る電の如く乍ち觸れ
乍ち遁れ飄然一飛其去る處を知らず噫是れ丁稚田舎漢は
馬鹿なるか抑もまた鳶や撈兒は利功なるか如何ぞ手
携ふる處のものを撈られ懷裏に藏むる處のものを奪はる
や孰か馬鹿孰か馬鹿孰か利功なるも非ざるよりと曷んぞ彼
明瞭なる眼玉を抜られ是が狡猾ある手を下すを得んや然

れども彼があらず馬鹿ふして此必らず利功なるも非ず此
時や奪はるゝ者ハ偶々其心を他物に移し奪ふものハ専
ら其目を此人に注ぐの故を以てなり心を移すものハ我身
省みず目を注ぐ者其体を離れず我心他に移れば我身を
ち虚を生し彼が目我虚を認むれば乍ち手を容るれ間を得
るよ因て攫奪らるゝなり彼の丁稚やボンヤリとして狗兒
の好事たるを眺め田舎漢やボカンとして野師のハ饒舌り
を聞かぬ知るべきなり況んや人の目たる以て我瑕を認め
我過ちを見るハ甚だ難しと雖も人の穴を探り人の虚を覗
ふハ最も易し譬へば碁將棋の勝負を傍観するが如し上手
ある者却て下手の挿嘴を受ると往々これあり是れ之を名
けて岡目八目と謂ふ吾輩未だこの岡目八目と何年の頃

に何から始まりたるや否やを知らずと雖も蓋し傍觀者の
他の假瑾遺失を認め易きを高き岡に登つて低き處を視下
すが如く其一目瞭然たるの四人の目を以て前後左右を四
視せると一般なるの謂ならん其意や龍斷を私せるも外な
らざるべし況んや驚擾兒の狡猾なる目より入つて鼻より
出で若し一片の物影その眼水より反射するあれば鼻以て能
く其香臭を嗅ぎ彼が手の我体より觸るや否や我物早く已
彼が掌中より落つ其眼力の鋭敏なるや畜も岡目八目のみ
らや兩眼或ひ十六目の功用を爲すも亦知るべからず丁
稚田舎漢の攫奪らるるも亦宜ならずや
丁稚や田舎漢や人間交際上は於て岡目八目の怖るべく戒
むべきと慮や攫兒が一品一物を奪ふの比は非ず汝が起居

行止の間必らず岡目八目が我身の前後左右を見込んで居
るを忘るゝ勿れ造次も頗沛も必らず之を思ふべきなり汝
が謹んで聞け世間には岡目八目の人甚だ多く殊に東京の
夥多しと雖も就中おそるべく避べきは新聞子なり數十の
探訪者を四方八方に派遣し山の手より新道の穿鑿湯屋理髮
七人浅草よりの何人芝よりの何人本通り新道の穿鑿湯屋理髮
所の探索の勿論裏店横町の隅より雪院納屋の中に至るま
で探らざる無く訪とざる無く常に數百の目を皿にして以
て全都を注視し朱引の内外を問はせ如何なる場所と雖も
恐らく新聞探訪の及ばざる處のあらざるべし上は高貴の
門前より下は私娼の二階に至るまで有らぬ事の一
として知らざるのなし故に昨夜に姦夫竊盜の今朝の雑報

欄内に詳記し櫻兒の狡眼も逆も及ばぬ大瀾眼ふして岡目
八目の巨魁と稱すべし今其一二例を擧て之を証せん
金時豆一ばいくと叫び去て白玉飴屋か玉くと呼び來
る午飯既よ喫して殆ど二時に近く楊街柳巷毎戸絃を習ひ
鏝ふ切歌清く曲急よ吹や川風忽ち甚九と變す此時や已
よ三時を過て徐よ晩粧に着手せんとするの時なり絃歌漸
く止で正よ浴衣を着け姉妓の糖袋を捧て洗湯に行ものあ
り雞妓の紅粉を携へて香具屋より歸る者あり或ひハ婆ア
連中井戸側を圍んで魚商と松魚比價を争ひ或ひハ三ど
んハ勝手口よ屈んで八百屋と野菜物の善惡を論ず行もの
止まる者雜沓を極め路次口忙がしくし溝板の聲喧すし
今や新聞問者の紛れ込で奇事を探るの時なり問者こそ

ッ入て櫓の下よ潜立をれば忽ち一奇話の耳よ上るあり聞
得たり一美妓の家姪と相對し密計を火鉢の傍よ談するあ
るを姪道ふ彼の旦那を引掛とるハ畢竟奇貨を握まんが爲
なり彼れ一回ハ新若竹待合茶屋なるべし裏二階よ喰ひ
一回ハ八百梅料理店なるべし離れ坐敷よ於て云ふした
れば早く妊の一字を與ふるも彼避る能はず汝ち坐蒲團を
抱ひて孕みたる眞似を爲し以て且的よ迫るべし又更に一
方を指示して曰之藝的小も亦説べし兩的を合れば其奇
貨少なとも百圓よ下らざるべし而して且的等若し妊れ
字を承知せざば更よ換るに出訴れ二字を以てせべしと
喋る哺子房れ策を議す安んぞ知らん早く密計の漏て探
訪の耳よ觸るを探訪ハ詳細よ聞取り將ふ去らんとするや

誤ッてエヘンの咳を發せ妓ビツクリ始めて軒の下より人あ
るを知りガラリ窓の戸を開くや否な屑屋の一聲を擬唱
し去る是れ八目此以て妓穴を探るの一あり或ひは路次の
隅に立て夫婦喧嘩の熾なるを聞く亭主の亂打し女房の
罵詈訛小兒の泣出し火鉢の引探返り女房の將に飛出して
之を派出所より哀訴せんとせ蓋し亭主の妓遊より生ぜし悶
着なり探訪者仲人と爲つて突然飛入り女房の袖を留て曰
く婦公短慮に逼る勿れ僕その道を分け其理を正し以て兩
意の和を謀らん若し派出所に出よを忽ち新聞紙を取られ
て暗夜の恥を白屋へ持出して互ひに外聞を曝せ此み請
ふ厭せ〜と其懇切丁寧なる亭主を撫む女房を慰め暫く
怒りを抑へて問ふ抑〜悶着の源因の如何ぞや婦人の淺

墓なる一々分明亭主の醜態を説き尽して殘を所なし探
訪者明細に記憶し終り慇懃に鎮撫の形容を竭し去るこの
愚夫愚婦も亦た安んず知らん我騷動の忽ち新聞の奇種と
ならんと其岡目の微妙なる神出鬼没或ひは屑商となり
或ひは幫間となり一人以て百業に似す噫新聞探訪者の巧
みある往々前例に類似する事の在るある非きんを争で
か誰を孕ましめたる誰の助力に係り何の縁れたるは何
の薄情を基する等の密事を探知するを得んや是も吾輩の
新聞探訪を目して岡目八目此巨魁と謂ふ所以なり豈に怖
れざるべけんや
吾輩因て考ふるも世人八目鱧を以て眼を療するの良劑あ
りと云ふも蓋し岡目八目は原因する者ならん何とあれば

魚も八目あるの猶岡目に八目あるが如く八目の精神を一
束して我両眼も移さんとを以て良劑と爲せし事
疑ひを容れ因て或ひに疑ふ新聞探訪者も亦た八目鰻を喰
て常よ其目の健康を保養せし者あらんか看よ岡目八目を
以て確乎と探り得たる奇談も誤つて空談も屬し往々逆捻
を喰つて詰責せらるゝとあり然れども鰻魚と一般もエラ
くニヨロくとしそ能く言て其責を追るゝ者あり是等
の頗る鰻魚も因縁あるに似たり稀ふに罰金禁錮罪を蒙
る者ありと雖も想ふよ是れ八目鰻の盲目を喰ひたるも非
ざれば岡目の病で二三目を缺たる時ならんと思測を然ら
ざれば決しと彼の田舎漢の攫兒は於るが如き目を抜るゝ
とあらんや且つ新聞子と云へば吾輩等が常よ一目も二目

も置いて怖るゝ所の者なまじ何ぞ盲目一般の失錯あらん故
よ新聞子の飽までも岡目八目の祖師と看做して暫らく之を
措き其他八目の多き常よ能く注意して醜態汚行を認視せ
らるゝ勿れ高貴の上よあつて下を視らるゝに固より岡の
高きが比よあらず山目万目ども稱すべきなれば我々の平
生その言行を慎む荷くも過失ある勿れ況んや奸悪をや且
那の從僕よ於る主人の番頭よ於る番頭の小僧よ於る藝妓
の箱奴よ於る花魁の了髪よ於る皆な岡の上にて其過誤
失錯を八目視せるあり戒慎せざる可けんや斯云はバ丁稚
了髪等の必ら吾輩を詰つて曰はん下よ上れ過失を認
るべきに澤目八目と稱せべきやと吾輩答へて云はん拜目
耻目と稱すべし是れ上の恥目下の咎むべきに非ざれば

宜しく其恥目を拜むべきの意なり且つ人の過失の責も
 我も益ある非を須く只獨を愼んで他の目に八目視せ
 られざらん事を思ふべきなり吾輩の鄙説綴つて此に至
 僅か二個の小目あれバ眼力甚だ疲勞せり故に閉目して黙
 くせんとす只恐る鄙説の以て諸君子の明目を穢さんとを
 請ふ幸ひよ大目に見過し岡目八目を張て吾輩鄙目は瑕
 を露とすある勿れ

○藝妓今昔論

粹癖居士投

梅曆の名熟去野暮跡を収め造化機論出て藝妓能く孕む
 花柳の事は指南なしと雖も猶起る矧んや粹士の誘導して
 止ざるよ於てをや近年嫖客の進歩往々人を驚かす是れ
 に梅曆造化機論の與つて力あるのみならず世人一般は花

柳も熟るあり今を距ると二十餘年前まで江戸の真中
 よ生れて藝妓の味を知らざる者多かりし而して今ハ皆
 妓の味を知る思ふよ昔日の人とくも敢て藝妓を好まざる
 に非ず只藝妓を愛するの暇と資力と乏しきを以そなり
 當時柳巷も往來する者ハ幕臣の放蕩家ふあらざれば諸侯
 も邸吏若くハ市井の俠客者流のみ其他を絶て其人あらざ
 るかり四百餘侯の邸内も勤番武士が表裏の長家を填め昇
 夫折助も亦た蟬集し其人員の夥多しきハ今日の比にあら
 ず皆門制あつて濫し出べからせ出るも亦た概ね夜よ入る
 を許さず憐むべし束縛れ武士ハ一月中も二回或ハ三回
 位白晝も芳原品川を襲ふと纏に其勇氣を漏すのみ此際獨
 り出入の束縛を受ざる者ハ邸吏のみ當時これを留守居役

と稱し其家遊を禁せず是れ其能之藝妓も狎る所以なり市
人も亦た束縛を被むり俠客者流もあらざるよりハ財産も
富と雖も濫ふ柳巷も入らず故を以て藝妓の數も亦た甚と
少よしして且つ濫ふ轉倒せき芳原の藝妓ハ嚴重の規則あつ
て轉ぶ能はず若し轉べば忽ち之を廓外に逐ふ故に容易よ
轉はせ具よ其絃歌を聞ぐのみ且つ其妓ハ概ね老婆も係り
強てつれを轉ばすを欲せざるなり當時柳橋を第一ハ繁昌
地と爲す仇吉米八の徒者この柳橋より出づ新橋今春あり
と雖も未だ振はせ其他赤阪下谷ハ皆微々のみ是を以て偶
々藝妓も狎る者あれば傲然人よ誇り人皆これを羨む束縛
時代の嫖客も噫また憐れむべきも非や今や然らず月郷
雲客固と藝妓に狎れ半熟書生も亦能く之よ狎れ市人も亦

た媚妓を捨て藝妓を取て藝妓も狎ざるを以て男兒の恥辱
と爲し貴賤貧富も拘とらそ争ふて藝妓も狎せんと欲す藝
妓も亦た競ふて能く轉び梅曆の功今に至つて始めて顯と
せ造化機論益々造化を巧みよす是に於て平藝妓の風習
も淫奔も流るゝのひならず殆んど媚妓を欺むき公然と枕
藉の價を定めよ以て之を鬻ぐと恰かも媚妓に大小の別あ
るが如きものあり客も亦た妓ハ皆轉むをべしと爲し復た
機を見て之を洗手鉢の邊に説の勞を取らせ直ふれを
待合船宿に誘へ亭主ハ問はずして早く已よ之を解し盃
盤未だ乾かず〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
異ならぬ聞が如きハ媚樓これが爲よ殆んど衰微を來せと
云ふ蓋は是れ柳巷の繁昌と謂ふべきか繁昌ハ繁昌と雖も

妓風顔取の黠より之を視れば寧ろ衰微と謂ふべきなり嫖客も亦た今日の藝妓を視るも昔日の藝妓を以てせき只その姿を擇んで其色を買ふれみ藝妓の氣風も一種の味ひあるを買ふに非ざるなり故を以て買ふ者ハ彈りるゝと雖も敢て愧と爲さず彈之者も亦た以て意と爲さず其情の厚薄ハ寧ろ媚妓ふ如ざるなり世人今の藝妓を呼んぞ一種の私窩と云ふ豈も其れ誣言あらんや余ハ昔日の妓風を戀ふ者あり故に藝妓論よ於てハ敢て守舊の誹を甘受し聊か以てこれを論ず讀者請ふ不粹者の妬言と爲す無んハ幸甚

雑放

○明盲の遁辞 或一人の男が主人に命合られと甲の家へ

竹の子を遣の之を手にて提て其路順どらと云ふので乙の家へ手紙を持て行ましたトコロが此乙の家の主人ハ些とも字を知らない男で常ハ女房を顧問として用を足して居る身で傍坐ひますが生憎と此日ハ女房の顧問が留守で主人公も困ったが去と手紙が讀ないと云ふのも外聞が悪いと思つたから手紙を抜ひて讀む真似をして乙イヤハ使ひ汚苦勞でした私ハ竹の子ハ何より好物でしてエ、是ハ美事な竹の子を澤山有がたうお歸りに成ったら宜しく仰しやッて下さい使ナニ此竹の子ハ外家へ持て行れですから此事が手紙に書てある筈ハありませんが……と云われて主人は顔が赤く爲ッたが又た何食はぬ顔で手紙を抜ひて見て乙ム、さうく私や誠ハ粗忽的男で困る

ト聲を發して手紙を讀む眞似乙「猶」この竹の子の遣す
あるはど能く見りやア此處も其事が書てある
 ○雙の誤解 甲と乙との雙があつて其處で出會ました 甲
 「イヤ是れいふ珍しいエ、トもう十何年貴方よお目よ懸ら
 なかつたが貴方の今年お幾歳よなりませ乙「ヘエ私しハ去
 年から濱町よ住居で居ります 甲「ヘエお健康ですぬへ
 ○清潔好でハ無かつた 甲藏と云ふ人があつて此人ハ雪
 院から出る度よ水をザブ〜掛てクック〜と手を洗ひ
 ますから誰でも清潔好だも云つて居りませスルと或日
 の事この人が例の通り雪院へ行て出で來ましたから定め
 し又た水をザブ〜掛て手を洗ふだらうと思つて居ると

例よないスマーシ込んで丸で手を洗ハないから傍に居た
 人も不思議に思ツと乙貴方ハ何時でも雪院から出ると人
 並ぶづれて手を洗ひ成さるに今日に限つてナゼ手を洗
 洗ひ成さらないのよス 甲「ナニ今日ハ手を洗さ無かつたか
 ら
 ○法螺の吹上手 一人ハ法螺吹先生があつて或客と近所
 の田圃を遊歩するとき法螺吹先生ハ客よ向つて鼻を高く
 し法君ハ御存じか知らんが彼の田から此畑まで夫から彼
 所ヨラズーと彼所までハ皆お僕の所有です客「ヘエ大層
 な御地所でそねへト其富よ驚いて居ると其傍の百姓がこ
 れを聞て百「ヤア彦衆や人を馬鹿にして居やアがるぢやア
 あアか他人の地面を皆な自分の地面だアチウてるぜ 乙「大

臆奴だなアと百姓の罵るを聞て法螺吹先生の又た容よ向
 ひ法どうも備人が多し者ですから中よ私しの顔を知ら
 ない者がありませ
 ○半風虱の鬨着 熊公の脊中に一疋の半風虱がノツ
 這て居たのを八公が發見して「ヤア半風虱が途惑ひ仕やア
 がッて着物の上を狼狽て居やアがらアと云ひながら何氣
 なく之をアツリと潰すと熊公の顔色を變て熊「ヤイ八や自
 己が大切に於て畜ておと半風虱をナセ殺しと八「ナセ殺し
 たッて高が知れた半風虱ぢやアねへか熊高が知れた半風
 虱だッてベランメー人の物を殺すのよ一言れ断りも無へ
 たア無法ぢやアねへか八「無法だッてベランノ一殺して惡
 きやア何故殺生禁制の札でも押立て置ねへんだ熊殺生禁

制の札がねへからッて自己の身体に附て居りやア自己の
 所有だト小理屈を云ッて仕方がない處うら八公ハ自分の
 襟裏を捜して一疋の半風虱を撮み出して八「夫ぢやア是を
 遣からこまで勘辨して呉ねへ熊「なんだ此様な骨皮道人見
 た機な疲れた代物ぢやア勘辨が出来ねへと云ふから夫から
 八公ハ禰神を捜したと着物を尋ねたりして十五六疋の半
 風子を生捕て八「夫ぢやア此中でアレでも手前の氣ふ入つ
 たのを一疋取て呉ねへ
 ○父子の雙 親も雙子も雙で雙が揃ったと云ふものハ隨
 分可笑な事があるもので或日の事これ親子の雙が店頭小
 居るときよ横町の久兵衛と云ふ人が其家の前を通りまし
 た父息子や今其處を通った横町の久兵衛さんだノウチ

「尊父さん何を云ふんだねへ彼れやア横町に久兵衛さんだ
 ヨ父「左様か自己アまた横町の久兵衛さんかと思つた
 ○近い火事の見へないシャーン〜と半鐘
 の打方が急劇から主人は眼を覺して主「オイ定吉やオイ定
 吉「火事だ〜早々屋根へ上つて火元を何處だか見て呉
 れ……………エ、オイ定吉「定へエ火事ですかと眠ぼろ氣眼で
 屋根へ上ると主「火事ナ何處だ西か東か定「イ、エ主「北は方
 か南の方か定「イ、エ主「遠さうか近いか定「何だか火が強ひ
 もんだから眼が眩惑つて本統の處が知れませんかから明日
 の朝能く見に来ませう
 ○兄「兄「狡狴 某田舎の百姓も兄弟があつて兄を多十と云
 ひ弟を權太と云ひましと此二人が蜀黍を作つたんだが其

蜀黍が例まなひ賣入の宜處から兄の多十ハ一策を考へて
 兄「ヤイ權太や今年やア仕合せとマア蜀黍が能く出来とア
 が何と是を二人で半分ツ、よ分べエと思ふんだが何だん
 べエ弟「宜うんべエ半分ツ、取べエ然だアが何處等か何
 分るンどや兄「自己が上半分とるから手前ハ下半分取りね
 へ弟「其様な馬鹿〜しい事があるべエか然なら自己ア廢
 止べエ兄「何故だヤ弟「何故アよく自己ア根固べエ貰つた
 アて仕方があるめへ兄「夫やア爾だかなアよ其代り來年は
 自己が下の半分を取べエから今年やアマア爾してかきね
 へヨと云ふので弟も夫とら爾しべエとヤットの事で承知
 しました夫から其翌年になつて弟「ヤア兄アやモウ蜀黍を
 植ても宜かんべエと催促すると兄「左様よなア蜀黍ならモ

ウ植ても宜かんベエが自己ア今年やア薩摩芋を植へエを
思ッて居るんだア

○孫兒の教訓

格子戸がラ~~~~

姉はん今日ハ.....

姉 オヤお糸はんかへお上ンなさい

糸 ありげたう..... 家長さんハ

姉 未だ歸りませんヨ

糸 サウ..... マア大層廣くツて奇麗だと..... アノ

今日ハお不動様エお参詣して来たノ

姉 夫りや宜かつたネ..... 此頃ハ忙しいかハ

糸 イ、エ姉さんハお出の時分ハお馴染が多イもんだ

から彼機よお座敷が有たんですヨ然けれど姉はんが

斯云ふ結構な身体にハなりの後ハお駒さんハ附て居

ても些ども往ないノ..... 夫まつけても姉はんハ逢

度ッて~~~~ ヤットハ思ひで立寄さんハすワ

姉 オヤお糸さん大層お世辞がよくお成とさねハお馳

そんだツと古い顔なぞ御盛んでせう.....

糸 イ、エアノ姉はんハ様ハ新樂よお成のを見るに附

てもフツ~~~~ 商賣が否よあつて来ましたヨ

姉 お糸さん大層沈着な事を云ひだねハ併し其氣が

お附なら妾がいふ事を聞なさいよ

と火鉢の側へ茶を入れながら

姉 誰だつて藝妓商賣を好する者もあるまいが妾を
 んぞの十歳の時よ殿父さんが死亡して慈母さんの丹精
 で困る中から種々な警古をし漸出る様よなるを長の
 年月あしも礫も仕ないを何處かへ行た阿兄さんが梅
 毒を煩ッそ大變な形装で歸ッて來て慈母さんの世話
 よ成て居る妾の未ど人よ附て居る身だから纏頭でも
 何でも宛飼扶持で自由にならずサ何程悲しい思ひ
 を仕たか知れヤアしないワ勿体ない様だが阿兄さん
 がお受度なつてマア重荷を卸したと思ふ間もなく慈
 母さんも亦た煩ひ附さどう見送るやうよありヤ
 ット一人だッさからも一生懸命に稼がうと思へば頭
 の飾から座敷着から其度毎よ苦勞よあるし眞實よ

世話仕人が無のだから染返し物をして夜着よ拵へ
 直きの何のと云ふ趣向だッさサウハ行届かあ
 から最役よ立ないと言はれハそ夫ありだから自然入
 費も餘計かゝるし何様よせつない事をまたり悔しい
 悲しい思ひをしましたらウサウカッて未だ見据も無
 い人の以ふ事を聞いて訝な事も出來ずサ顔が廣くなれ
 ばなる程交際ハ張出錢ハ多クあるホンよ一日も樂を
 しと事ハ有りヤア仕ないヨ近頃たッて今戸の御前や
 傳馬町の旦那が彼是云ッて下すつたけを新身を持
 くづまの者が如何あて三日だッて居られヤアしあ
 し向ふ様でも直きよ面白く無くなつて果ハ面倒よな
 るのが鏡よかけて知れさるンですから何したものど

ソツチコツチして居た中に斯いふ身に思ひ懸す成た
 んですが結構な事も何よも無いんです。唯氣樂なの
 と手堅いの計りが頼みなんです。ヨ何時が何時までも
 人様よヤレ是と言はれるもんぢやア。あから充分で
 無くツても堅固いところへ身を極ないとよしない苦
 勞をした上、場所を變へ又もとの稼業でもせざる機ぢ
 やア。夫こそ悲しい譯だから心掛て些と宛の手習ひで
 もし假名の附た新聞で字も讀みならひ針持やうも
 も覺へるのが何よりです。ヨ自分が斯なつたから元の
 稼業を無性よ悪くいふンぢやアないが長くする事ぢ
 やア有ません。お前はんが姉はんくさ。お云ひだから
 ツと妹か何ぢや。お前はんが姉はんくさ。お云ひだから

眞實見へし物語りに腮さゝ入て聞なぢらハロリと落を一
 滴の半襟つたふ其風情を夫と見てとり此方も氣の毒
 姉 オヤマア頼と事を言出し心持を悪くお仕でい
 けな。いよ又家で訝よ云とせると悪いから顔を直して
 お置なさい
 後の戸棚おし開て化粧道具を取らせば
 米 姉はんナア宜ございませす。よ餘まり御深切な話
 一でツイねへ……………オヤ折角のお茶をさまして仕舞
 てサ何しよんでせう……………
 とグツと吞で眉刷毛と鏡ばかりを鳥渡借と直して仕舞
 るも折表を開て歸ツと來ると四十の上を多く起さぬ
 人風の意氣拵へ

糸 オヤお歸り成さいまし

主人 お糸さん珍しい手

糸 ハイ誠にしはらく……大層長談しを致しましたモ

ウレ暇も仕ませう

主人 何も私が歸つとつて知らぬ者ぢやアあし急で歸

らすと宜ぢやアないか

糸 イ、エ最長いと居たんでモワ

主人 お雪や(女房の名なるべし)今日(今日)濱町の御隠居の所

へ行たらお前の事を聞なすつて祝つて下さつたの

だヨ

と包を其處へ取出すのを見

雪 オヤ何だか書たものが挟んで有ますよ

手は取て開て見れば短冊よ

浮萍のついのよるべを尋ねれば

また根ざしのある世ありけり

雪 オヤ是ハ祝つて下さつたお歌をすかねへ如何云ふ意

味なんでせう

糸 姉はん私も見せて頂戴な

と取あげて見る中、家長の懐中物を亂箱へ仕舞ながら

主人 お前にもお糸さんも其歌の講釋をし聞かせや

うかノ……併し餘り長くなるら此次よしやうヨ

糸 ハイ何か後生ですか

○貧乏大黒 慾野深藏と云ふ男があつて平生は、大黒を祭

つて頻に福を祈つて居りましたが、イッテ祈ても拜んでも些

とも功能がないから深蔵の大變も怒って深「オイ凡太……」
この大黒の延喜の悪い貧乏大黒だから何處へ打棄つても
宜うら打棄つて来いと主人の命令だから凡太の大黒を持
て田圃へ行つて棄やうとせる處へ一人此奴ア貧乏大黒だから打棄つて
「それ大黒を何するんだ凡此奴ア貧乏大黒だから打棄つて
仕舞うんだ男ナニ打棄るのだと勿体ねへ自己が十錢出を
から自己も賣て呉ねへか凡「ム、お前欲きやア賣て遣ふよ
ト大黒を十錢も賣て歸つて来ると深「何處へ打棄つて来た
凡「ナニ田圃へ打捨つて来やうと思つたら何處の人さう十
錢で賣て呉と云ひませから十錢で賣て遣ました深「仕様の
無い大黒だなア自分の打棄られるも慥ないで又た人小
散財をさせやアがツと

○花兒の頓智 一人の花兒があつて腹が減ても食事も出
來せ口が渴いても飲事も出来なから困り切つてボンヤリ
腕を組で橋の下に坐つて居りましたスルと橋の上を或る
立派な身軀の人が酒を酔つて「千鳥足でギツクリと
……とシヤツツリを去て苦しうに通るのを聞附て花
兒の急に竹杖を腰に横へ右の立派な人此前よ立て大音あ
げ花兒「ヤア卑怯な未練な名梨權兵衛父母の隣よ供よ天
を戴かず我が花兒ふ姿を變じ多年の間艱難辛苦せしも汝
ぢを討んが爲なり汝ぢ親の敵尋常よ立上つて勝負せよ……
……と不意を喰つて其人の吃驚仰天して通り人「僕の人を
殺した事もなく又人を苦めと事もない汝ぢの何者なるか
早まつて後悔するな……花兒「旦那シヤツリが止つたら一

錢遣て下さいナ
 ○吝嗇な婆さん 或處に吝嗇な婆さんがあつて毎日の飯
 も人並に喰はあいで金を溜めたが此金を家へ貯蓄ておくと
 火事で焼たり泥坊に取れでもすると玉無しもあるから戀
 奴ア何處へ埋る時に婆さんかざると思つて其金を瓶の中へ入
 れる庭へ埋る時に婆さんかざると思つて其金を瓶の中へ入
 なるのどヨ人よ金の姿を見せるのぢやないヨと云つて土
 を掛たが其金を埋るのを惡漢がチヨイと見たから溜らな
 い其夜惡漢の蛙を澤山持て來る金と引換へ行ましとスル
 と婆さんの其事を知らあいから二三日遠く金何したか
 知ら一寸顔を見やうと瓶の蓋を開て見ると二三十疋の蛙
 がヒヨコくくくと飛出すので婆さんの驚き婆この金

本統ま正直な金だねへ老婆だヨ老婆が見る時よア矢
 張金で居るれたヨ……アレ飛のぢや無いヨ
 ○山神の即察 或貧乏人が米代やら酒代やら店賃やら何
 やら角やら四方八方から責らまて困苦處から七日七夜氏
 神の社ま立籠つて何予福を授けて下さいと願つて其八日
 目の朝歸るときよ不思議も其途中で一圓の金貨と五十
 錢の銀貨とを拾つたらア有がたい是こそ氏神様が授
 けて下さつた金だとこれ一戴くと其金がヒマリと額へ粘着
 て何しても取れあひ強て之を取らうとすると額が痛つて
 溜らないから其儘家へ歸つて其歸る女房に話して何した
 ら宜からうと相談せると女房ナニ其位な事ア譯やアあ
 ぢやあいか亭主譯やアあいつて何ぞるんだ女房鼻れ頭へ

桂馬を張つて傍覽何方か取れらぬ
 ○眞似れ返報 或道樂男が女郎買ひ行つて幫間や藝者を呼
 んで飲や謠への大騒ぎの時、皆夫々よみ箱の藝をするの
 よ道樂先生も何か面白い藝をして一坐を驚かし遣ふと
 思つても何も是と云ふ藝が無い處から色く考へて櫻婢を
 呼び男「オイお前御苦勞どが薦と杖を買つて來て呉るいかト
 命令るのを傍に居る女郎が聞いて媚且那何を成さるれでス
 男「お前の親父の眞似をするのサと云ふと媚妓の顔の色を
 變て急よ細帯を梁よかけ縊れて死なふとをるから彼の道
 樂先生は驚いて男「お前何ををするの」と媚妾やお前さんの兄
 さんの眞似をするれサ
 ○一重ざぬ

襦袢させてふ出れ音心せかれて昨今を々ぞ洗濯針仕事
 よ惜む其日の短くて張物板の夕日影時雨てあつる黄昏ど
 き裕衣さへ着ぬ肌うそに仕立あげたる羽織さへ我物なら
 ぬ賃仕事を小風呂敷ふ手早く包み反故ばり障子の中へ向
 ひ

慈母さん依頼物が出来まえたから隣のあむさんの
 處まで鳥渡行つて参りますヨお薬を召上るあら涼爐に
 かけてありませうら……

と云へど答へも涙あがら隙間よりさし覗き又た立戻り
 御病氣勞れかスヤ〜と能く熟眠お出の様子この間
 に一寸行つて來せまう……
 包を抱へて取出せ下駄さへ禿て黒塗れ昔の流石忍むるゝ

よ荒く一げも輪捧の鼻緒も足もそぐなぬを履てどつか
の出て行く隣も同玄詫住居萎める花も疎なる櫛の垣の片
折戸開てこなたよ小腰をかゝめ

婆 おをさんお出なさいませか……

婆 オヤマア態よく持なすつこのですり取よ上らうと
思ッて居ましたかマアお早いじゃア有ませんかお手
利の實に違ッたもんでせねへ……慈母さんの御不快
の何様でお出なさいませ今日もお尋ね申さうと存じ
てる中よ此頃流行の取退き無尽へ誘引れて今方歸ッ
て来ましたのでツイ御無沙汰を致しました……お仕
立の出来とのお裕の方をすう……
女 ハイおみ裕も一緒よと思ひましたがお天氣都合で

張後れて居りますから直き跡から上ませが子何だう
急よお寒く成りましたから羽織だけ先へ拵へて參
りましたか嘸ゆめし悪ふ沙坐いませうから何卒宜しく
先様へ仰しやッて下さいまし

婆 ナアニサ大違ひでせヨ……貴卿に何時かお話し

申さうと存じて居ましたが先様と云ふの何縣とか
の方でお家の大層よくッてお出なさるのでませが遠く
から出て入らッしやるので万事不都合なと又た細
君もお出なさいないれですご仕立物を頼なさると
云ふのも些と様子の有る事ですヨ……毎日お機よ
貴卿がお薬とりよお出のを何時かお見掛成まつたと
見へて私おがお使え頼まれへ行た時に前の隣の人

の容貌と云ひ様子からも卑賤あい取りだが……
 る氣よお掛なさいますなだが身粧も悪しどう困ッ
 て居る様だら先が承知あら世話どしと遺度が聞て
 見ての呉まいかと仰しやるんですヨ……夫から私
 が兼ふお聞申した通りアノ方ハ元ハ立派で湯出ど
 つたのがお兄いさんハ鹿兒嶋の戦争も討死をなすつ
 そ夫から間もなくお家ハ焼る其後も引續いそのお不
 仕合せで不快の悪い慈母さんを大切よしてお勧めな
 さる方があつても未だ縁附せに出のですと申しと
 ら夫ハ大層よ感心なすつて是非聞て呉と仰しや
 るのでお貴卿がお堅固から仕事でも有つとらと仰
 しやツたのを思ひ出して夫で種々お頼み成せつとら

であるのヲ何で着悪いなんぞと仰えやるもんでおか
 又お手利をそのを召悪からう譯もあし今朝も一寸
 お呼びあすつと此單衣ハよくあはが裕にでもする様
 よ上てお呉とお氣附と成さりやう追ふ仕立ておあ
 びあされば一枚何程の割でない宜賃錢も下さらうし
 貴卿の心一ツ次第で母慈さんハお爲も屹度ある
 よ違ひない此仕立が出来ましたら後一緒よ参り
 ませう何様ニサソイ旦那サ……直オイソレども仰
 しやり悪ければ御挨拶ハ跡をもよけれど親の爲よハ
 勤に出る者さへイソラもありますよ堅固も時と時節
 に依るから成らうものならねへ貴卿……
 淫な道よ引入れる語よ悔しさ腹だしと寧ろ断りこの儘

よと思ふ心をかし鎮め立るに辛き朝夕の烟のしろのさす
けよと細い手業を始めたも我身一ツの事でのなし柳よ受
とと氣をとり直し

女 何だかおばさんの云ひの事へ私しまやア分りま
せんが跡も追く仕立ませから……

婆 エ、夫へ承知でさアね今夜お届け申して代を戴い
て来るよも何とか貴脚がお極なさると大層バツが宜
れだけれと爾いかな無ければ夫の宜がこの單物の先様

女 の折角の御深切あなた貰ッて置なさいませ
た上よ餘分の品をお貰ひ申しちやア濟ませんから……

……

婆 イ、へサ爾仰しやツてハ角がたつて……

女 お断り申しますヨ……オヤ彼は饒舌ッて居る中
スツぱり暮して仕舞ましたよ母も侍て居ませう燈も
点すよ来ましたから左様なら……

と挨拶まで立出しが見さげられさる口惜さと思はき門の
戸荒らかふバツマリ切る物音を聞て老婆が聲をかけ

婆 ああ外れましたかへ

女 ハイ……

婆 エ、頼だ悪い辻占だよ
○訝な無心状 甲某より乙某に送りたる無心状ありとて
丙某より寄せられさる手紙を見るに成はさ借よとしと

様な貰ひに來た様な餘程變挺來な當り障のない文句なれ
 ばお笑ひ草までよ左よ掲げと御覽よ入れる
 朝暮の冷氣彌増し移換の時節と相成以得共貴君の最
 早線入襦袢等の御支度御揃ひ成されい哉小子の相變
 らせ汗臭き單衣一枚よすナルくふるへ居いれ我身
 あがらも可哀想よ存をい夫よ付一寸御頼み申し上い
 の外の儀よの之なく元來金錢の天下の廻り物と承は
 り居りい得共何故か小子宅への廻ッて參らせ甚だ相
 困り居い間若し貴家よ滞在致し居いれ僅に二圓三
 圓よても宜敷い故大至急拙宅へ參り呉い様貴君より
 御傳言下され度且又た貴君の涉都合より涉召連れ
 下されい共或ひの小子より迎ひよ參りいても宜敷い

よ付免よ角貴家に滞在致し居りい哉否や至急涉報知
 のほど相願ひ度い也
 ○變流怪の誤披露 變者骨皮道人が怪主よて本年本月三
 十二日何處だか若蘭亭よ於て變流怪を催ふしとる處その
 變流の皆自分免許の鼻ッてきデハナイ腕ッてきの大天狗
 なれば其中の上出來ばかを引固抜て左に録し諸君のお
 眠氣覺しよ供す
 變流怪の臭句
 洋文字を見て幽靈と蚯蚓よび
 聞た風隠居と退去取ちがへ
 横文字を縦にして見る負おし
 苦勞性隣の嫁よ心配し
 蟹の舎
 羊の熱
 天狗坊
 鈴

轉んでもけが無かつたか下地ッ子
 下手茶番見物人の澁いかほ
 だし遺ふ氣松魚ぶし一袋
 雲掴む相談ウカと手が出せき
 証據人なくて仕合せ大のろけ
 酸も辛いも皆承知つけ物屋
 涉新造よ云譯ないと下女辞退
 河虎の情死陸地へ飛あがり
 奥山と上野の實地反對し
 燈氣でも流石の伊勢屋旅をなげ
 黒ン坊れ娘鍋きみ矢鱈ぬり
 大黒曰く昆沙公ナト旦那へ

信 妻 低 山 影 左 堂 笑 綯 吝 黑 迂
 平 蘭 頭 子 慶 機 高 々 太 坊 光 紛
 香 痴 成 汚 哀 可 舊 小 等 不 無 感
 迷 寧 程 本 々 笑 臭 太 子 埒 証 寸

二度までハ無駄足させた臥龍梅
 我物と思へど重し下駄の土
 新聞で雪院張るハ痔持たる
 用ぬやう種々の功あり咳ばらひ
 まゝ母もたまゝ奮發南部鮭
 支那人ハ頭よ尻尾同居させ
 看板よ偽りのある兩替屋
 無理な泣文魂ひを入れろへろ
 顔もみぢ娘ハシカと返事せせ
 蚯蚓孝おやの面まで泥をぬり
 持ととハ云へ其實ハ見放さま
 ふふやけ小家事の助けや恵み金

香 痴 成 汚 哀 可 舊 小 等 不 無 感
 迷 寧 程 本 々 笑 臭 太 子 埒 証 寸

西洋の醫者見放して瓶をなげ
素人芝居衣裳にもモメが出来
○一夜膝栗毛

へ、エ
尖 口

第一回

抱腹居士稿

某所小喃治と云へる獨身暮しの一奇人ありけり此喃治ハ
常に浮世を茶小して渡る酒亞突者ゆゑ所謂同氣相求め類
を以て聚るとやうにて其交はる者も多クハ池酒亞の
人物なり一日黄昏に及ぶころ表より吐鳴る例の喋吉ヤイ
喃公……在宅か……と云ひながすがタビシヤと手荒く戸
を明るこのとき喃治ハ破れ蒲團を被つて片隅に寐て居た
りしが喋吉の來りしに眼を覺して喃「オイ、く喋公チリト
ンペーお手柔かに頼みてへせ家屋さんか、くお目玉を頂戴

をるから喋「へンお目玉を頂戴するが聞て呆ろア家屋と税
金が恐怖つてこの東京に生て居られるものゝ……夫やアど
うと何故燈花を點ねへのだ喃「ナせだつて天井に氣が附
れやせんか月の無くとも星の明りで澤山だから別段洋燈
を用ゆるにも及ばずサ喋「何ぞか旨く胡麻化して其實ア油
が無へのだらう喃「君ハ實小不粹で困るテ吉原が明るくな
れば自家が闇と云ふ事を知らねへか併し油が無へナカと
云ちやア些と喃治先生の名譽に關する次第ぶからマア待
倣へ是から洋燈と瓦斯燈及電氣燈を混交て壹万本を點て
見るから膽玉をおツ潰し給な……ハテナ此邊に洋燈が有た筈だ
がと手探してマツテ取喃「オイお客様をお使たて申て失敬だ
が急く時小ハ親でも使た君一寸此洋燈を摩娑て呉給へ僕

石油をに入れるからと石油の徳利を執つてブリキの小燭
へつぎ込む此とき喋吉はマツチを擦つて火をつけ喋
オイ喋公の燈花の何だか變に青い何したんだらう是
ぢやア何の事アねへヒウドロくと來さうだせ喋本當にさ
うあら恐怖かんべーか……ナ、ナール程青い青い下坂の
刀だハテナ何故此様に青いだらうと暫し考へてム、解了
た喋どうしたのだ喋焼酎と間違たのだ喋焼酎は(其奴の)借
い事したぢやア無へかダガさ焼酎の時へがあるたア近頃
少し出來過のやうだがナせ又た何云ふ譯で焼酎があるの
だ喋ナニサ少しばかり薬用にするって酒屋から胡椒化し
て來たんだが今洋燈へ飲せて仕舞たからモウ無へ喋との
落膽せざるを得ざるなりでげすナ喋ダガ酒の少し買てあ

るのら君も飲度ア一杯飲ふぢやねへかと徳利を喋吉の前
に置ば喋本當か……何だか怪しいせ洋燈へ飲したのが焼酎
でお互ひに飲のが石油なかテ一な餘り下さうねへせハ、
ハ、ア喋大丈夫サ喋ドレく僕が審査を逸て遣うと徳利を
執て香を嗅ぎナールほど這奴ア素敵だく飲べしくと兩人
が胡坐をかいて差し向ひ缺た茶碗に冷の酒さしつあさへ
つ泰平樂口三味線の淨瑠璃も片言まぢりの太閤記小田の
蛙の鳴音より鑼如鉢の無茶聲の湯屋の稽古と知られたり
兎角する中隣の婆ア壁一重に小言を並べ婆モシれ隣の若
い衆お前さん達が先刻から騒ぐのを棚の物はガダく皆落
る障子の脱れる丸で大地震のやうで眠れなはあ少し静
にして下さい喋喋公隣の婆アが何んとか文句を並べて居

るせ喃お婆さん堪忍して下さい全体この治郎が……オイ喋
公だから僕が静にしろくと謂て居るのだ喋笑かしやアが
ら喃公が死と彼の婆アが執着予アハ……と云ふ處へ又た一
人來る者あり是亦た野良倉仲間の語助なり語大層陽氣だ
あア喃イヨ一語助哥兄この暗の夜を屈とも思はず様ころ
の涉入來其處の端近イザ先づ是へ語と來られちやア僕も
團洲氣取で然らば涉免と行度なるせ喋ろの面で團洲を氣
取た日ふやア閻魔王へ所得税を取れるせアハ……ア語また
喋公の悪口が始まつたナ儘よせうせ色男ハ敵役小廻るの
だ是でも愛婦の所へ行やア一寸お前はん一寸語助はん眞
實にお前はんハ様子の宜事眞實お前はんハ憎らしいは
と粹だよ然から浮氣するの無理ぢやア無いけれと此問

賤妾が云つた事を忘れちやア嫌だよ本當お忘れると執着
よナインテやアがつてなアオイ隊長……ニ一喃公新様に捻
るせ喃オハ痛へくこの畜生巫山戯るない喋オイ語助一常
談ぢやアねへ涎が垂て居るア見ツともねへ語然がサ……喃モ
ウ宜と云ふ事よア一杯飲ねへ語ナニ酒か……酒ハモウ徳
利を見ても胸が悪くなるト云ふなア表向で實ア飲ていが見
た處モウお了らしいなア喋お察しの通り喃無くなりや
又買て來サ語買て來テ一とつて酒屋ハ鬼門だらう喃へん
餘り人を輕蔑て賞ひますまひよ此懐中此の如き青紙幣
が潜伏でおいで遊ぶはずのだ彈かりながら喋オット皆な
まで饒舌り給まふなオイ語助一負るない先刻のソレ彼の
一件が未だ……語有ても此處で出しちやア喃公の鼻が明か

ら先づく此處の喃公に花を持せて喃口ハ調法な物サ然
 が幾許か持て居るたア感心の勝溜リドウだ隊長是から何
 處かを飲直まぢやア喋さうサ此處でドマばマ遣と又婆さ
 んに吐鳴れるからなアハハハ、喃ナニ冀ヲ彼様死に損
 ないの地獄婆ア位を恐れるやうな活智のねへ喃治たア喃
 治が違はア喋影辨慶か語何ハ扱ねき飛出すべしと無
 敵流三人揃つた氣樂もの何れを目當と定めあく五寸の溝
 板がマ〜〜饒舌りあがらに出て行く

第二回

此處の名に負ふ銀坐街石の柱に鐵の窓二階三階巍峨とし
 て商店會社新聞社軒並正しき体裁の櫛の齒をひく如くに
 て。數方の瓦新燈煌々と宛然晝を斯むきて鐵道馬車や乗合

馬車右往左來の人力車旦那如何と勸むると人間小翼の飛
 道具晝夜分とぬ繁昌の實に東洋の小英國開化の涉代小遭
 遇し身ハ此上もなき幸福と互ひに欣喜くて一杯機嫌の
 千鳥足三人揃つてフヲ〜と通り掛るを見て取る人力車
 夫車夫旦那返車でスお安く如何さま喃コウ車夫さん自己
 の様な瓢床治郎でも旦那だとか親方だとか云ふのも其原
 因はと云へば〇が欲以からだらう宜しい解得た...所で車
 夫さん何も涉相談だが...車夫へい〜喃エト是から新
 橋へ行ってサ柳橋へ廻つて車夫へい〜喃夫か芳原へ行
 て小塚原をぬけて千住へ行って又たオート歸つて洲崎へ廻
 つて新宿へ行って車夫涉常談仰しやらすに何處まで...喃マ
 アサ黙止て聞ねへ夫か品川へ行って東海道を下つて西京

へ行って大坂へ行ってサ又た長崎まで行って支那の香港へ渡つて夫から英吉利へ廻つて倫敦で藝妓を誘つて花見をして佛蘭西へ行つてパリスで女郎を買つて大愉快をやらかして大平洋で納涼して此處まで歸るのだが何程だ語「オイ」
 何を寐言云つて居るのだ喃「人力車の直段を定て居るのよ」
 喋「アッハ……車夫はモウ先刻から居やア仕ねへせ喃「アハ……」
 ……這奴ア弱つた馬鹿くしい此時後より来る鐵道馬車笛の聲「テ、イチ、イチ、馬丁「エ、イ」
 乗合馬車「淺草ア」
 且那乗ませんか「エ、イあぶない」
 人力車「へイ免御免喋「うるぎいなア喃「ア、詰らねへ夜店でも素見ぞうぢやねへかト三人あがろ露店の前へ立つ喋「コウ是はぞうだ購求ねへか語「夫や何だ喋「なんだか知らねへが此様な長い

袋よ語「それを購求て何みえるのだ喋「僕の思ふにやア横鼻の代用にしたら宜かろうと思ふテ語「なるほぞ其奴ア旨へ考案だ僕買ふ……道具屋さん其長い袋は何程だ道具屋「この編傘の袋ですか是はれ負申して貳錢五厘にして置きませう語「何だ編傘の袋だと何にしる一寸見せて呉ねへと手に執て語「此奴ア素敵「アレ一番ヤッ附て見やうと突然前を捲る道具屋「モン、何を成さるのでは坐います語「息子に被せて見るのだ道具屋「珍常談ばかり夫ハ編傘の袋ですせ語「何だッて宜ぢやねへか自己の息子に自己が被せるのだ道具屋「夫やアさうですが未だ代金を頂戴しない中ハ品物丈ハ手前の物ですか其様を汚穢事をされてハ困りませ語「はめて見て工合が宜けりやア其代り直よく購てやらアと争

ふ處へ角燈をヒカリ〜照して查公來り查クヤ〜往來
をも憚からず醜体を顯はして何をして居るのぢや語へイ
へイ恐れ入りしました…只今この道具屋で新發明の犢鼻褌
を買つて居るので座ります查この馬鹿め夫ハ犢鼻傘の袋
ぢや犢鼻褌ふハべられぬわい語ナニめるのでハ座りま
せん頭からハッ被せるので云ふ中にソレ喧嘩が始ま
つたと野痴馬連驛を知らず群衆なす甲ナニ喧嘩だと打の
めせ〜乙喧嘩ぢやア梓へ巻賊だ〜丙巻賊ぢやアない
狂人が病院から脱出したのだ人々何様な面だか見てやれ
やれと其何物たるを知りずしてワイ〜〜騒ぐのハ
東京の名物とこそ知られたり查ろの方ハ規則を心得お
らぬか語へイ〜何も…查存せぬと申すか凡ろ人民たる

者ハ政府の規則を心得て居らんけりや成らんものぢや
當今ハ舊幕と違ふて此大運轉に於て不体裁の事をしてハ
相成らぬチウ事ナク此度だハ勘辨ノウして遣はす以後ハ決
入ラテウ事ナク此度だハ勘辨ノウして遣はす以後ハ決
して箇様な事をしてハ相成らぬ語へイ〜查テ其方の住
所ハ何處ぢや姓名ハ何と申す語へイ失語助と申しやし
て芝區大傳馬町十五丁目千八百五十八番地平民三ッ井善
右衛門の隣リ是我道樂と申そ者の厄介者で涉せへやすト
云ふを查公ハ手牒を出して逐一記し查以來ハ氣を附よと
叱言つ、群衆の人を押分て復た巡行をせらるハ流石ハ
民保護の役注意の上の注意ナリ語オイ僕公手前の涉處で
ひどい目に達たせ僕今ハ掛引ハ中ハ面白ッ之彼の語助

の面附ア一な無かつたせアハ……語喃公だッて左様ぢやね
 へか傍に居ながら僕の叱られるのを凡槍立て聞て居るた
 ア不人情な奴だなア南其機なに溢したからッて仕方がね
 へ自業自得だものヲ語何故自業自得だ蝶うの方ハ嘗今の
 涉規則を心得るゝぬか凡る人民たるチウものは南へイへ
 イ恐れ入りましたへイくくく……かアハ……語人を馬
 鹿にして居ヤアがッ三人アハ……ア語時に手前達ヤア今
 夜那處へ行く積りだ南ぞうサ何だッて此處まで出て来た
 んだらう……喋公是からウシやう蝶何えせうッて斯しや
 うッて外に誤迷案もねへから寧ろ北國筋へでも繰込ふか
 語其奴ア妙く喃公ぞうだハ南宜かんべー然がモウ何時
 だらう語ぞうサ九時過の夫とも十時か十一時か乃至又た

十二時か一時ふヤア少し間があらうか蝶何を云ッて居ヤ
 アがるのさ面白くもねへト馬鹿口を叩ながら歩ともなく
 日本橋の近所まで行とる時車夫旦那お安く参りませうか
 喃何處へでもお前の勝手な處へ参るが宜車夫エへ……涉常
 談のけてお安く参ませう蝶三人で芳原まで繰込ふと云
 ふ一件だが高臺三塔で後押し綱引でも何んでもあしふ三
 人一所に合併乗だが一山百文で行ねへか車夫へ、へ、へ、へ
 、御常談ばかり蝶夫ぢやア何すりや宜のだ車夫お三人様
 で五十錢下ぎい蝶メヲホウメー五拾錢出しヤア此方で挽
 ア車夫夫ぢやア何程出ます蝶三人て三十錢あら宜から
 う語ぞうサ三十錢なう無理のねへ處だ車夫「一人様十錢
 ヲ、ぢやア餘り苦酷ぢやアありませんか……旦那涉無理ハ

申しませんか、五錢、張込で下さい、喋「宜しい持て
 来い車」オイ若衆さん一人十五錢、で出来たが行ないか
 乙「有がたう行よト二人の人力車夫のがら〜と、車を
 引よせ車〜イ旦那乗車なさい、喋「オット夫ぢやア語助丈
 は前の車へ獨りで乗給へ僕と喋公、此方の車へ一所に乘
 かり語「さうサ僕ハ肥体て居て目方が二人前あるか、喋「大
 男惣身へ智慧が廻り兼だア君の事だ、語「小男ハ智慧が廻る
 も高が知れテ、一な君達の事だア、喋「甲車夫若衆さん
 さん宜か乙車夫ソレ来たト掛聲かけてガク〜〜〜イ、
 免〜頼みます〜

◎第三回

歸て説く三人ハ腕車に乗て威勢よく本町馬喰町もはや過

て淺草橋をがら〜と通り過んと爲る折か、だん〜空の曇
 り来て咫尺も辨せぬ闇となし雨か雪かは知れぬ、今
 も降来る有様に車夫旦那大層くらく成て来ました、喋「今朝
 の夕の寒成り別だか、大觀雪ぶらうヨ車夫「雪に降れちや
 ア車挽ハ往生です、雨旨く云ふせ雪の二三尺も降て見なせ
 へ車代ハ取り放題だ、の、車夫さんの爲にやア金が降るや
 うなものだ、車夫「雪が降たからつて餘り高は事を云やア乗客
 が無いから行ません、語「餘り降る〜と云つて呉るない前兆
 が宜ね〜から、喋「生云ふせ辻占がイシラ宜ツたツて持た事
 アね〜癖に語「マア空論はさて置て今夜實際の處を拜見
 給へ、流石の喃的も涎を流すから、喋「公ノ一間、板面もしや
 今晚持たなら其時や涎をソ〜レながす、ア〜ンだアハ、

、車夫「中よる上手でねへ語「イッラ暑たつて増賃は出
ぎねへせアハ、、此時ちらくと雪の降出したる小鷲
きて蝶「何だか降て来とせ車夫「雪のやうです語「そやくユキ
度愛婦の傍つと喃「恍惚處ぢやアねへ冷てへヤ蝶「手前達
餘まり彼のふ茶ッ非阿魔に熱くなつて居るから天道様
氣を利かして頭から冷して下さるのだ語「茶ッ非阿魔と
ア殿しいぢやねへか價ありたから僕様の花魁は蝶「鬼瓦と
唐獅の畜が無けりやアね尋ね者たら語「馬鹿ぬかせ語助
様の花魁「ア一な小野の小町と楊貴妃に小紫と浦里の眞實
を合併した様だ喃「時に車夫をん最少し早く歩いて呉ないか
車夫「へいさうでした先刻かう餘り話しが面白ものだ
かッツイ挽のを忘れて居ました蝶「道理で車が動あねへと

思ッて居た早く遣て呉ねへ乙車夫「吾儕ア腹が痛くツて
一寸とも挽ませんから此處で伊免を蒙ります南「ユウ申談
云ッちやア行ねへせ最少した辛抱して挽て呉給へこの時
大道の客待車夫客の通行を見て車夫「旦那安く行ませう客
本八丁堀までイッたら車「四十銭遣て下さい客「二十で行
いか車夫「夫ぢやア最十銭遣て下さい乙車夫「旦那へ本八丁
堀まで一人三十銭だと云ひますが高いでせうか安いでせ
うか喃「餘り安くも無へなア車夫「是か本八丁堀までと芳
原までとい何方が遠いでせう蝶「この畜生オッウ引掛て来
やアがつたを車夫「オッウ引掛る譯ぢやアありませんが
ウか少し増額を遣て下さい甲車夫「さうサ何程か増額を出
して貰はなきやア自己も腹が痛くなりさうだ蝶「イッラ増

しやア宜のだ車夫「お一人廿錢ッ、増て下さい喋滅法界の
事を云ふぢやアないか、掛合中向ふより来る乗合馬車エ
イヤと駈来るに如何なる途端なりしか車と車と觸合て
馬車に壓る、人力車メリと斗り小真棒の折て後ろに倒
れたり蝶オ、痛へく南痛へく酷い事しやアがるなア車夫
ハ憤怒たる聲ふて車夫「この頓痴機め何をまやアがる……馬
丁「大道の真中へ人車を留ておく奴があるか瓢床驚痴めさ
まア見ろト云ひながら復たエイヤと行掛る倦まで不敵
の傍者馬丁すて置き難しと二人の車夫ハ逃まな遣なと怒
りつ、虎を救むく致圍にて跡追掛て駈りゆく喃治ハ跡に
顔を盛て喃オ、痛へく……語助「後生だから桶屋を呼で
来て呉ねへな語桶屋を呼で来てさうするのだ南頭が破裂

たから箆をのけるのだ蝶「ろの序に大工を呼で来て呉ねへ
語「厄介な事ヲ云ふぢやアないか大工を呼で来て何をやる
のだ喋「横ッ腹へ凹凸が出来たから鉋で削除ッて貰うのよ
語「本氣になつて聞いて居やア人を馬鹿にして居アがらアハ
、、此處へ以前の車夫は馬丁を誘て来て車夫「サア此
結局ハドウするのだ手前のお影で大切な客に怪我を
させお負に肝心な商賣道具を破損されちやア明日から鼻
の下へ飯を運ぶ事が出来ねへ南痛へくこの結局はドウ
するのだ手前のお蔭で大切を頭を破裂されて痛へワイ語「
大變な騒ぎが持上ッたア喋「オイヤ語助「其様なに頭ばか
り搔て居たッて仕方がねへ早く生すとも殺まともテキヤ
キ落着を附て呉ねへ語「然ッて僕にも仕方がねへ馬丁ハ車

夫に向ッて馬丁「自己だッて破損さうと思ッてした事ぢや
アねヘッイ馬の狂ひかゝ出来た失錯だもの其様なにグッ
クア云ハ糸へで勘辨したッて宜ぢやねへる車夫「この東變
樸めグツク云ハ糸へでたア何の事だ此様なに目茶クに
打破されて黙止て居られるかい甲車夫「豪膽奴だ叩き殺せ
ころせ馬丁「オイ手前達ア何しても勘辨しねへと云ふのか
車夫「當然よ車を舊の通りに直まて罰金の五圓も出しやア
勘辨して遣ア南「自己の膏藥代も序小書入て呉ねへ語黙止
居ねへ馬丁「この瓢床治郎め自己の方から下に出て居りや
ア好きな多話を突アがる……コウ自己も男ぶ手前達の芋虫
みと様な人足を相手に仕ちやア少し外聞が悪以が新成り
やア仕方かねへハア出頼助め相手に成れりやア成て見ろ

……車夫「ベランめー七ツや八歳の餓鬼ぢやアあるめへし其
様威しの喰ねへア……野痴馬の車夫は口々に甲「疊附て仕舞
く乙「打殺せく蝶面白く成て来ッも云ふ處へ角燈を携へて
靴音ギシくと二人の巡公来られ巡「コラく其方共は何を騒
いで居るのぢや語喃公モウ行うちやねへか南「何だか今夜
ハ巡查さんに執着れて居るやうだ蝶「巡查さんが来ちやア
喧嘩が消て仕舞て詰らねへなア語この寒む處小突立て居
たッて仕方がねへからモウ行ふぢや糸へかサア行ふくと
三人は跡に構はず行かける蝶「車賃を拂ッとか語ム、さう
だッけ……コウ車夫さん今夜芳原まで行ア二圓や三圓に酒
手は舊發する積りだッたんだが何にしろ此災難ぢやア仕
方がねへからマア是で勘辨して置ねへト二十錢を與ふれ

ば車夫「へい、今夜は賊は飛でをねへ事をしまして、氣の
 毒様でした語、サア行ふくと三人の跡、お構はず別れ行く喃
 「蝶公何をして居るのだ、早く来ねへ、喋、身体が痛くって歩
 行ねへ、のら僕ア是か、歸らう、喃、活智の糸へ、治郎ぢやア、糸
 へか、是が首でも、チョン切れと、か云ふン、あら眼がねへの
 見當が附ねへと云ふ、次第もあるが、ナニニツの大眼玉と
 二本の足がありながら、歩行ねへと云ふ、猪俵一があるもの
 か、語、さうだ、南公の云ふ通りだ、此處で君が歸りやア、僕
 等も一所、歸らなけりやア、成ら、糸へ、からマア、少し我慢して
 一所、來給へ、蝶、夫ぢやア、諸君、お對して、同行する事と、確定
 しやうか、是も、朋友の義務だから、喃、何處で習はったか、オッ
 ウ、生意氣に出たナア、ハ、ハ、ハ、ハ、ダ、ガ、斯云、晚、お行やア、持る

せ、喋、それが、樂みで行やうなものサ、語、今夜、登樓て見給へ、本
 當に、これ前はん、實があるンだ、ヨ、ナ、カ、テ、ン、で、ね、へ、オ、イ
 南公、ハ、テ、ナ、南公、ハ、何した、オ、イ、南公、南、オ、イ、喋、早く
 来ねへか、南、皆な、何處に居るのだ、語、此處だ、く、何を、マ、ゴ、し
 て居るのだ、南、然か、うって、眞暗だから、見當が、附ねへア、斯
 云ふ、事と知った、う、自家を出る時、小鼠の、眼玉を、一ツ、借て、來
 だ、ッ、け、語、馬鹿な、事ヲ云やア、がるな、アと云ふ、處へ、後、ら、提
 燈を、携へて、來る人、あり、けれ、バ、喋、旨へ、ア、後、から、提、燈、が、來
 る、から、少し、待て、居ねへ、彼の、提燈の、後、に、隨、着て、行やア、明、る
 く、ッ、て、宜、から、南、なる、は、龜の、甲、より、歳、の、功、だ、君、も、隨、分、ぬ
 から、ねへ、あ、ア、喋、ソ、レ、來、た、ア、折、角、提、燈、の、金、主、を、目、附
 た、と思、つたら、彼の、畜、生、横、町、へ、曲、つて、仕、舞、や、が、つ、た、語、併、し

此處まで来たものチ真逆歸る譯ふも行ねへから何でも早
く行へしくと飽まで撓まぬ助倍の心も空小威勢よく懸路
の暗の夫ならで前後見れど真ッ暗がり面白づくふガヤク
と駒形並木廣小路馬道田町を打越て日本堤の二本棒大門
まころ来りぬる

◎第四回

紅樓翠閣。香燈花燭。絃聲魂を奪ひ鼓音情を牽くチヤカクポ
ン。石部金吉其人と雖も此廓に入る時ハグニヤクとして
菟鞠の如く爲り武藏坊辨慶の不粹的と雖も此地に来ら
しむれば屁痴固き了簡を改たむべし況んや凡夫凡人に
て誰か迂調天にならざらんや誰の財布を空然にせざらん
や又た況んや放郎蕩客をや古人の川柳に云へるあり青樓

にふねる子息を餅に搗ぎ宜なる哉彼の三人ハブラくと大
門遣入て仲の町茶屋の二階の大愉快者相手に豪庭巨商
三味線太鼓笛鼓藤八琴やう柳琴葉歌都く一トツチリト
さも面白さうに聞居たり折から聞ゆる葉歌の聲
やうくと心の丈ハ屈いとけれど人目多けりや儘な
ね果敢ない務めの其内小求めた花を餘所外へ取れ
てなろかへ

掛牌「イヤオイ 鼓の音」ボンク 三味線「チヤカラカ。チヤンク
南今夜ハ思ひの外に賑かだるア 吾人が彼様な愉快で居
るぞ僕達も一騒ぎやり度なつたが例の茶屋で一猪口遣て
登樓か蝶例の茶屋ア何屋だ 語例の茶屋ア例の茶屋よ 蝶
山口巴か語「ウム、蝶」西の宮か語「ナニニ 蝶」長崎屋か林屋か

決して多分な散財の掛りませんでしてへ、語
 角登樓て見やうぢやねへかト三人内に入れば立番
 様だヨ妓夫入らッシーやい此聲と共に三人の楷子段をト
 威勢よく登る此時樓母來りて樓母入らッしやい
 此方へと見通しへ案内して樓母初會様で坐いますか
 馴染様で坐いますか喃皆な初會だから成たけ別嬪で
 愛嬌のある床の安い立引の利奴を三疋生捕て呉ねへト云
 ふ聲に聞覺へのある聲と樓母は能く顔を覗き見て樓母
 「アレマア南治さん……アレ喋さんに語助さんだよマア惡ら
 しい人を欺してさオホ、喋旨く遣かさうと思ッ
 て居たのにモウ矢敗ちやツたアハ、皆アハ、思ッ
 樓母一筆さん目出度さん……と歌姫の名を呼び
 入り來り一筆

ればハイと答へて三人の娼妓草履ハダ入り來り一筆
 「オヤ皆さんお揃ひでオ、ソレ此間は楽しみ……ナニ隠
 しても行ませんヨねへ目出度さん目出度さん本統に慣ら
 してよ……さん精出してイシメてお遣ヨ一喋餘計な事を
 饒舌ら絲へで何處か外の坐敷へ移轉ぢやねへか……樓母
 さんお坐敷の何處……二番室がつてるノ……サウ……夫ぢや
 ア四番のね坐敷にして呉ナ……モウお照しは行てるノ……
 サウ……夫ぢやア彼所へ行ませうとドカく……と坐敷へ
 這入る折のら運ぶ臺と酒語オット來やまた何が何でも蟹
 が嘴でも酒が無くちやア夜も日も明ねへ喋酒ならば何の
 已れが櫻かなッ喃酒の愛ひの玉簪酒と女が此世に無けり
 や生て浮世小用はない喋樂まとは後ろに柱前に酒だらう



やした... 所々一杯頂戴ナニ大きな杯宜しい結構大杯頂戴
 ...オ、溢れる、喃「自己が喃ッて見せるか、譽て呉ねへ... サア
 彈て呉ねへ、語「自己が喃ッて見せるか、譽て呉ねへ... サア
 喃公吐鳴たり、喃「夕暮に詞(船とはれ氣が附れやしたナ)詠
 先見渡す隅田川詞(堤を見さつし日曜と来て秋草の盛り大
 分もどりが見へ升せ)月に風情の待乳山詞(強情植半は陽氣
 ですナ)帆かけた船が見ゆる予へ詞(後かト糞船は恐れ入り
 升ナ)アレ詞(ね聞なせへ鳥が啼く鳥の名も詞(橋を越ちや)都
 に名所が詞(コウ)船頭八百松は暮切とらうか)ある日いなア
 喋「妙、猫泣せの開山犬笑、ハまの大將と... 譽て違てへが恣
 も宜しくと云ふツンペラ坊の節なしお負に二玉の瓢床履
 リふやア五臟六腑までがデングリ返ったせアハ、ハ、ハ、ハ、

、是より或ハ唄ひ或は踊り滅多矢鱈の大乱痴機べろく悪
 口を敲くものありム、ヤ、無暗に喰ふ者ありガブ、酒を
 飲む者ありグウ、寐る者あり夜も早や己に深波り四面静
 る大引過ぎ非常を驚む折木の聲とも、に坐を起て廻る床
 に、入りふける
 雪ハ巴に降り頻る金籠山の鐘の音も陰に籠りてカウくと
 寐耳を貫ぬく曉の六時の鐘に眼を覺し南治は窓を抜き見
 て南「イヨ、是やア大變な降だわい... コウ喋公起ねへか、
 何時まで寐て居るんだ... オイ喋公、ア、ハ、ハ、折角よく
 寝て居るものを何ガヤ、騒ぐんだ南「マア起て雪を見給へ
 な大變降て居るせ喋「イッテ雪が降たらウラツて宜ぢやねへ
 か雪が降たら借た金を返済ませうと云ふ燈文ハ書て居給

摺子段を降んとする折から誤って足を外しスンデン轉り
の轉くと墮落せしに驚き眼を覺せば是は南柯の一夢身
ハ依然として破れ蒲團の裡にありたりなるトでも胡麻化
して置うか

よせぶみ

女魔の宜いり 秋目さむし 投
熱い寒いも彼岸までとやらで熱くなるときハ急よ暑くな
る寒くなる時よも急よ寒くなるハ毎年知れ切れた天然の規
則なりソコで暑くなる時よハ裕を引剥でもマア用が足る
様なもの、寒くなる時よハイクラ何ぞサウ手輕よハ行
あいかから小子などの平生ハ心掛が悪いから毎年冬
取附にハマコくするが皆さん支度ハ宜いから
心の儘なり 志連田琴太

美味物が喰たい美着物が着たい結構な煉瓦造りの家に住
たい顔る別嬪と寐たい公債証書を枕にしてペラの上へ寝
轉びたいと思ふ人の平生は切々と働いて先づお金を溜
なさい爾それ美味物を喰ふのも美衣服を着るのも結構
な家に住の別嬪と寐るのも公債証書を枕にしてペラの
上へ寝轉ぶのも皆な心の儘なり

老嬰生

昔し徳川の時代より火事を江戸に花と云って賞美しとさ
うだが此不景氣よシャンと打附られて溜らないソ
ユで此シャンとを聞かない様は東京の花を咲せない様
するにハエト何云ふ工夫したら宜からうム、左様と
火の用心をさッしやりませう

人間も草木に如し

育く庵主人

皆さんも御存じの通り水天宮様や金刀比羅様の縁日へ行
て見ると植木屋さんが種々な植木を列べて居て其中にハ
真直あのもあれば屈曲つたのも有りますは是ハイッラ屈
曲つて居るも生れ立から屈曲つて居るもの有りません
真直よ立居るのも屈曲つて居るもの植木屋の培養やう
一ツで斯あるので人間も矢張り此通りで正直よなるも
心が屈曲るも皆な父母の着育やう一ツでス

お菓子な話し

酒く小松太

津田仙氏が酒の害を演説されてから大分禁酒する人があ
るさうですが成ほど酒ハ毒よ違ひない酒のめは何處か心
の春めさく借金取も驚の聲で酒を飲むと何も面の皮が厚

くなつて失敗が多い尤も菓子も留飲が起るから一
 利一害と云ふもれ一害デハナイ一概にさうも云へぬ
 酒の害ハ人よまで及ばし菓子の害ハ留飲が起つても自分
 ばかりの事で人れ邪にハならないかマア咽のク
 ヒ附を我慢して菓子を喰て居た方が大丈夫だらうと存じ
 ますら皆さんよ於ても此治郎お菓子な事を云ふと酒乱
 顔を仕ないで小これ説も御賛成を乞ふ併し同じ菓子でも
 胡麻菓子だけハ度止遊ばせ

廣告

○奉公人雇ひ入廣告
 拙店儀追々繁昌ふ付き奉公人増多雇ひ入れ度ハ間左よ合

格よて御望みの御方ハ至急御來談を乞ふ

- 一 男女を論ぜず年齢ハ何歳よても宜し
- 一 食物を食はず一生涯命に能く働く者
- 但し小遣ひ錢も持參の事

寒田區貧乏町 何野何兵衛

○捧類大安賣

- 一 木偶の杖
- 一 客齋棒
- 一 貧棒
- 一 大ベラ棒
- 一 口惜ん棒
- 右外まだ
- 澤山抄座ハ間お望の人々ハ抄報知次第口
- 一 乱棒
- 一 泥棒
- 一 二本棒
- 一 ノッアラ棒
- 一 食辛棒

ハよて差上申そべくい

棒問屋

心張棒用心輕白

○馬鹿よ附る薬

右存じの涉方ハ郵便税先排ひよて左れ處へ涉知らせを乞ふ

大場加三太郎

○財本入札拂ひ廣告

- 一 不景木
- 一 生意木
- 一 厚釜椎
- 一 恥柿
- 一 迂奴の大木
- 一 一屁意木
- 一 槍栗
- 一 浮木
- 一 錢梨
- 一 雪杉

一 氣をもみ

一 小鞠梧

右ハ至急入札拂ひ致しハ付涉入用の涉方ハ身震ひして誤入札あま但し槍栗錢梨恥柿等ハ貧棒又ハ火の車を造るよハ至極適當の良財なり

賣拂ひ主

平氣野 平左

拙者儀今般薄情學研究ハ爲め汎魔船よ打乗り尻よ帆を掛て御轉場を發し無鉄方を経て厄介國へ出帆致しハ付てハ一々暇乞よ參り兼ハ間手前の勝手を以て跡足砂を掛け素知らぬ顔でノソソ出發致しハ間この段辱知諸君よ告ぐ

熊公の娘

花肌てこ鶴

特別廣告

左の書籍抄入用の抄方ハ東京日本橋區通り四丁目書肆金櫻堂へ抄遠慮なく抄注文あれ但し金と引換

- 一 商人立志編
- 一 滑稽國夢物語

これに新文終

版權登錄

明治廿二年四月十五日印刷
同年同月十五日出版

著者兼發行者

山梨縣平民

内藤加我

日本橋區

通四丁目八番地寄留

印刷者

東京府平民

永井鏝之丞

小石川區

掃除町卅三番地寄留

發行所

金櫻堂

日本橋區通四丁目



花笠亭思海著

古今列國六雄八將論全一册

腕方社會
○正價金三十錢 ○郵税金二十錢 ○通運送八錢

- 歴山 大王論
 - 孫子 武論
 - 魏 曹 探論
 - 諸葛亮孔明論
 - 司馬懿仲達論
 - 補 正 成論
 - 上杉謙信論
 - 豊臣秀吉論
 - 眞田幸村論
 - 比斯馬克論
- 本書の前人の未だ嘗て夢想せざる新奇の眼點を發見論評したる者よして其筆勢の活潑なる殆んど天外に飛揚する者あり且つ其議論文章の趣味ある恰も陶笛の如し馬格勒の此評と雖も焉れよ加ふるをなし乞四海の活潑男兒一部を求めて英雄の思想を養ひ給へよかし

面白滑稽狂進怪

洋綴全一册 正價十五錢

開もこの狂進怪よ何様な品物が放り出してあるかと云へば人間の四情すかち喜怒哀樂の腹の中を嘘八百倍の顯微鏡で覗いて早取寫真で撮た種かれは笑ひたいお方のお笑ひ遊ばし怒り度お方のお怒りなさい泣度お方のお泣きさいと斯色々な道具立をして何方様も御意に適ふ様よと怪主が心を籠て並べ立た譯ゆへ何卒御見物(ていさい)御求を願外

おどけ新聞

洋綴全一册 正價十五錢

此新聞の記者は例の骨皮道人よして慣例の酒亞説○雑録○雑成○投書○廣告等色々欄題を別ち例の滑稽洒落の新趣向をしつ實面白可笑き冊子なればサアく看官御覽遊ませ

一分線香

一册 金三錢五厘
見本の郵券四錢よ

一分線香の一名を落語の大帳と申ましまして
て窓中より古風のお断今様の新作
三題ハおし娘けんつゝき譚をを記
しましてうれしくつれづれのお慰み
長き夜のお伽草紙よ此上もないお優美
で面白い本では座い升
●明治二十二年 第七號出版
一月十日
尙引續き出版仕候間御求めの上ほん
とう面白事と御評判の程奉願上
候

發行所

青柳堂

東京日本橋區新右衛門町六番地

金櫻堂

東京日本橋通四丁目八番地

左よ記載仕候書籍は總
て弊店藏版而已御座
候へども弊店よてい東
京大坂の申よ及はず出
版書籍類何んでも取扱
直印も精々勉強仕候間
何卒御注文願上候

懷中義太夫

第八編迄出版

●**倭文範** 壹編八段より十二段迄
八編迄まで名作七十二段有之候

大人形の遣ひ人上手なりといへども淨瑠璃なくば思ひなん酒席の義太夫節理よ落るといへども之を語らずば興なからんされば阿古屋の言草あらねど清元常盤津を唄ふも酒席の座興義太夫節も時の興座興と云ふ字よ二つはないゆゑ通客ともいれる諸君は是非本編をも懐中して好たらしむと思われ給へ實は此書の義太夫好の鴻益甚からざる近來稀有之良書なり

●**同倭文範**

五合本洋綴ッロイ
編合本洋綴ッロイ
美本一冊正價四十錢
懷中義太夫と申て一段二冊は致候品も有之代價一冊付五厘つゝは御座候段數ハ七十貳段有之候

三遊亭圓朝口述小相英太郎筆記

●**綠林門之松竹**

全一冊 洋綴
正價十五錢
此書も三遊亭圓朝氏の作にしてやまと新聞よて大喝采を得また俠賊の傳記にして同氏の其前道具話して致しました忍ヶ岡義賊の隠家と申したお話しを綠林門乃松竹と外題を改め咄しの條へも餘程改良を加へましては開き(でない)は覽よ入升から何卒買求を願升

三遊亭圓朝口演酒井昇道筆記

●**栗田口露笛竹**

全一冊 洋綴
正價二十五錢
此書もやまと新聞へ連載し高評を蒙りし人情小説として圓朝氏が得意の艶話を乞ふ乞大方の雅君は購讀を乞

三遊亭圓朝口述
松永魁南筆記

●**怪談乳房榎**

洋綴全一冊
正價十五錢

本書の三遊亭圓朝氏の著作よして其概略を言へば高田砂利場村の大鐘山南藏院の天井へ雌龍雄龍を墨繪で書きました菱川重信といふ人の物語して此重信は雄龍だけを彼の天井へ書まして非業最期を遂けて終望を果しませんから死よましてから幽霊が書懸ました雌龍を又書たと申事て末よ赤塚村の乳房榎の前で一子眞與太郎が七才よて父の敵を討ちますと云ふ極凄いの話しでござります

松林伯園口述佐藤以文筆記

●**西京噂之高倉**

洋綴全一冊
正價十五錢

本書の西京よて巷説最も喧すかりし彼の高倉の寡婦阿政暴殺の件を講談師松林伯園氏が京都重罪裁判所よて事實を傍聴し其記述する所を當時の新聞紙と照對し其誤聞を訂正し事實よ添ふるよ同氏が得意の雄辨を震ひ演述せられし新講談を筆記せし者なり

瘦々亭骨皮道人著

●**滑稽國夢物語**

洋綴全一冊
正價十五錢

これを小六ヶ敷云へば奇趣異想天外より降る之を解易く云へば奇妙奇能の新著よして其著者の誰なるかと問ひ當事滑稽家は其人有り知られたる骨皮道人されば卷中記する所別よ功能書を附せざるも其面白き推して知るへし江湖の諸君乞ふ一讀して奇趣異想奇妙奇能の虚を乞るを知れ

● 耐忍 偉業 商人立志編

洋綴ク
ロース

此書ハ吾日本ニ英商ありと其名を万里の異境ニまで博したる近時有名の豪商廿有餘人を撰み加之商賈必用の條々を掲げ而して偉業成功の美譽を求むる要路を説明せし書あれば商賈有志の諸君争つて購讀せられ以て常ニ坐側ニ置き偉業人々の思想ニ注目せし利を益するハ云も更なり吾全國の勿論遠く歐米諸國商人の實況及び商ニ就て進退舉劬併せて得失富饒を求め得るニ足る商家六箱三畧と言つ可き良典あり請み四方の君方試み朗讀せられんことを

大久保夢雅氏著

● 復讐 孝子之血涙

洋綴全一冊
正價十五錢

此本の繪入朝野新聞にては高評を蒙りました續きはなしを合本よ致しました故何卒は求め相願升

● 美談 女權 文明之花

全一冊

此書は女子の尤も緊要として讀ざる可からざる小説にして其概畧を言ハバ阪地の一箇の女學生あり姓を櫻木名を花と云曾て女權の伸ざること嘆じ慷慨管ならず平生男女同權の是非付て疑ふ所あり時一朝彌生春三郎が女子改良演說會に於て男女同權にして夫婦同權ニ非らずと云る演說を聞き豁然として覺り竟り自ら論題を設けて諸新聞に投じ其女權の擴張を痛論し後ち之が縁固よりて才人春三郎を娶り而して後ち共ニ俱ニ協力して以て女權擴張の新聞紙を起立す尋で才人其時を得て國會議員に撰まれ而して又女子主權權を附與すべき議を論述し遂に其女權擴張を貫徹したる女子必用の良書と

